

<実践報告>

インターアクションを重視した課題達成型学習  
—ユタ大学夏期日本語集中プログラムの事例—

川上晃子 ユタ大学夏期日本語集中プログラム日本語講師  
徳井厚子 信州大学教育学部言語教育講座

Task-oriented Learning Focused on Interaction  
—A Case of University of Utah Summer JSL Program—

KAWAKAMI Akiko : Japanese Instructor, JSL Program  
TOKUI Atsuko : Language Education, Faculty of Education, Shinshu University

This paper introduces a teaching method of task-oriented language learning focused on interaction, which was conducted at University of Utah summer JSL program. The purpose of this method is to improve communicative competency achieving tasks. The authors pointed out that this method focuses on the process of interaction with people outside classroom

【キーワード】 コミュニカティブアプローチ インターアクション 目的 課題

1. はじめに

信州大学とユタ大学は国際理解の進展と文化的な関係の強化を目指すとともに多面的な学術共同研究の推進を図る目的で、1996年3月、学術交流のための大学間交流を締結した。両大学はこの協定に従い英語研修、日本語研修等で双方の交流を行なっている。留学先での習得単位はそれぞれの所属大学で認定される。

日本語集中プログラムは、1998年度より学生の学術交流プログラムの一環として信州大学教育学部で行なわれているものである。2001年度のプログラムは1998年、1999年に引き続き3回目となり、日本語学習の他、戸隠、小布施へのフィールドトリップ、書道、剣道、着つけ等の文化学習他を行なった<sup>(1)</sup>。また、期間中は日本語パートナー<sup>(2)</sup>が日本語学習のサポートをした。なお、参加者は全期間日本人家庭でホームステイしている。

本報告は2001年5月～6月信州大学教育学部で行なわれた日本語集中プログラムの中で行なったインターアクションを重視した課題達成型学習の実践報告を行なう。

2. 日本語学習の概要

2001年度夏期日本語プログラムは全4週間であり、日本語総学習時間は77時間、参加者は18名である。授業は基本的に月曜日から金曜日までの週5日、1日に午前3時間と午

後 2 時間の計 5 時間が日本語学習に当てられている (3)。

このうち、8 時間（火曜日の午後 2 時間×4 週）（全 4 回）を初級、中上級クラス (4) に分け、会話能力育成のための会話クラス（Communicative Japanese course）として当て、会話を中心とした授業を行なった。会話クラスのシラバスは以下の通りである。

#### Communicative Japanese Course (8 hours)

The goal of this course is to improve communication skills. Learn several expressions such as showing gratitude, apology, compliment, declining, request. Role play, interview, speech, discussion are used in this class.

### 3. インターアクションを重視した課題達成型学習の目的

従来、日本語教育の分野では、オーディオリングガルアプローチとコミュニカティブアプローチの 2 つの教授法が対立するものとして取り入れられてきている。高見澤 (1996) によれば、前者は意味より構造を重視し、言語学習を構造、音声、語彙の習得と考え、コンテキストはあまり重視しないのに対して、後者は言語学習をコミュニケーション能力の習得と捉え、コンテキストを重視している。

参加者にとって日本語集中プログラムは短期間で日本語を集中的に学習し身に付けるという意味がある。このためレベル別に分け、効果的に日本語の語彙、構造、音声を身につける必要がある。しかし、その一方で日本語学習者にとって日本で生活しながら日本語を学習することは、日本人との接触場面の少ない母語の環境で日本語を学習する環境とは異なり、コンテキストを重視したコミュニケーション能力の獲得という意味でも重要な意味を持つと考える。そこで本プログラムでは、77 時間のうち、8 時間をコミュニケーション能力獲得の時間に当てることにした。

コミュニケーションを重視した学習は、インターアクションを通じてコミュニケーション能力を獲得していくことが目的とされるが、コミュニカティブな目的が不在であると、相互作用のみで終わってしまう危険性がある。そこで本実践では明確なコミュニカティブな目標を設定し、課題を達成していくインターアクションの中でコミュニケーション能力を獲得していくことを目的として実践を行なった。特に、4 週間の密度の濃いスケジュールの中ではホストファミリーや日本語パートナー以外との接触も限られるであろうとの予測から教室だけではなく教室外で外部の初対面の人と会話をする機会を作り、一般の人とインターアクションを通して学んでいくことは重要ではないかと考え、教室外活動を取り入れた。特定の人と関係が継続している中でのコミュニケーションではなく、課題を達成するまでに初対面の日本人とコミュニケーションを行ない、情報を獲得するのである。また、目的を提示して学習することでコミュニケーションに即時に役立てる表現が身に付けられるようにした。以下、4 では初級クラス、5 では中上級クラスの実践報告を行なう。

## 4. 初級クラス実践報告

### 4.1 概要

このクラスの学生（男子5名・女子6名）の大半は日本語が全く未習か若しくは米国において初歩の日本語だけを学習してから参加しており、これまでに来日経験・日本滞在経験がない学生がほとんどであるため、学習する項目（言語行動目標）は教科書<sup>(5)</sup>ですでに学習済みの表現を基に多少の応用した表現を紹介するようにし、未習部分である敬語や丁寧語および未習の動詞の活用形等は最小限にとどめるようにしつつも、現実の場面で使用が多いと思われるものを出来るだけ厳選して導入するようにした。最大公約数の表現と学生の既習の表現との兼ね合いを図ったわけである。

1回目と2回目はそれぞれ3～4項目の目的と機能を学習。教師が各機能で必要と思われる語彙、表現を学習した。各回ごとに達成目標が書かれたゴールシート（Goal Sheet）を生徒に渡し、それを一週間後の次の回までに完成させてくることが宿題となった。

3回目と4回目は1回目と2回目で学習した内容を応用して外に出て実際に日本人と話してみる、手紙を書いてみるといった活動を行なった。

1回目と2回目の授業で与えられたゴールシートは3回目の「お菓子探し」4回目の「ホストファミリーへのお礼の手紙」につながる伏線にあたるいわば小さなゴールである。

以下に学習内容を示す。

#### 1回目

目的：①あいさつをする（毎日の挨拶・家での挨拶・他の人の家での挨拶など）

②自己紹介をする【機能：会話を開始する，質問する，答えを確認する，会話を終了する，感謝する】

③日本語について質問する【機能：会話を開始する，質問があることを告げる，読み方や書き方を尋ねる，意味を尋ねる，答えを確認する，会話を終了する】

④ゴールシート「日本語パートナーのことを聞き出す」【機能：質問があることを告げる，答えを確認する，感謝する】

方法：口頭練習，ロールプレイ「自己紹介」

#### 2回目

目的：①ほめる【機能：ほめる，ほめ言葉への返答】

②話し掛ける【機能：呼びかける，（知人，友人，初対面の人，目上の人に）話し掛ける】

③気持ちを言う【機能：感情を表現する，応答（励ます，同意/同情する）】

④店で買い物をする【機能：話し掛ける，欲しいものを告げる，欲しい数量を告げる・金額を確認して購入する，気持ちを言う，励ます】

⑤ゴールシート「標識の意味を聞く」【機能：質問があることを告げる，意味を尋ねる，答えを確認する，感謝する】

方法：口頭練習，ロールプレイ，シミュレーション「マクドナルドで」

### 3 回目

目的：後述

方法：教室外 課題達成型学習「お菓子探し」(\*1)

### 4 回目

目的：気持ちを文章で表わす，日本語の手紙の形式で書く

方法：実際に手紙を書く 「ホストファミリーへのお礼の手紙」

当報告では全4回のうち3回目の「お菓子探し」(\*1)を中心に報告する。

## 4. 2 課題達成型学習「お菓子探し」

まず学生はレベルが均等になるように3つのグループ(A・B・C)に分かれた。出発前に課題とルールの説明をし，和菓子に関しての情報を与えた。店における会話の簡単な例をプリントと口頭で紹介した。

各グループにはそれぞれ別の和菓子屋<sup>(6)</sup>の住所と名前が書かれたカードと購入費用(1グループに1000円)を渡した。学生はグループごとに学校を出発して和菓子屋へ向かい，教師は学校で待機する。グループで協力して指定した和菓子屋を探し出す。和菓子屋で店の人にインタビューを行ない，お菓子を買ってくる。教室へ戻り，ゴールシートに記入，完成させる。

#### (1) 目的

- ①学習した表現を使って初対面の人に質問する
- ②適切な場面で適切な表現を使用する。

#### (2) 課題

- ①お菓子の店へ行く
- ②季節のお菓子を買う
- ③そのお菓子のことを店の人にインタビューする
- ④学校へ帰って，ゴールシート記入
- ⑤買ってきたお菓子と写真を撮る。お菓子を食べる

#### (3) 課題を行なうにあたってのルール

- ①全員が日本語を話すこと(例えば，道を聞く人・お菓子を買う人など役割分担をする)
- ②道を尋ねるとき店の名前と住所が書いてある紙を見せてはいけない。(店の名前や住所を口頭で言わなければならない)

#### (4) ゴールシートの内容 (実際にはすべてひらがなで書かれている。)

以下の質問の答えを完成させること(③～⑥の項目をお菓子の店の人にインタビューすること)

- ①お菓子の絵(を描く)

- ②学校から店まで歩いて何分ですか.
- ③お菓子の名前
- ④お菓子の名前の意味
- ⑤そのお菓子の季節は何月何日から何月何日までですか.
- ⑥誰にインタビューしましたか.  
(名前)
- ⑦お菓子はひとついくらですか.

(5)この課題を達成するまでに学生に使用することが期待される機能 (【】内) ({}内のものは当会話クラスではなく通常のクラス授業で教科書「みんなの日本語 I」で学習された表現)

①店にたどり着くまで

【(道で知らない人に) 話し掛ける】・【質問があることを告げる】・{道を尋ねる}・【答えを確認する】・【感謝する】

②店の中で

【(マクドナルドでの会話から発展して) 欲しいものを告げる】・【欲しい数量を告げる】・【金額を確認して購入する】・【(お菓子に関して) 質問があることを告げる】・{(インタビューの) 許可を得る}・【答えを確認する】・【読み方や書き方を尋ねる】・【感謝する】

#### 4. 3 結果と考察

##### (1) 結果

##### 1) 実践結果

指定の和菓子屋を探し当てるまで、学生たちは学習した表現を使用し問題なくすぐに目的地を探し当てた。しかし、C グループが店へ行く途中小学生に道を尋ねたところ、案内をしてもらえることになったそうだが、「私達についてくるように…」などの会話の理解が困難で苦労したようであった。

和菓子屋でのインタビューは初級学習者が訪ねて行くことを事前に知らせてあったために最初からインタビューが断られることがない前提であったためか、中上級クラスとは違って、課題の達成までは特別な問題はなかったようだ。しかし、お菓子を買おうとすると店の人の好意から無料でいただくことになる等予期せぬ出来事が起こった。

##### 2) 学生の感想から

購入した和菓子を経験に残しておく意味でゴールシートの項目 1 にあるように絵に描くことが課題のひとつにあり、当初はゴールシートの完成によって達成感を得ることを意図していた。しかし、学生たちは戻ってくると同時に「とてもきれい」「すばらしい」など

と感動の言葉を口にしながら、自分達のカメラでお互いにカメラに収めはじめた。和菓子に対してこれだけの感動があるとは講師側は全く予想しておらず、いわばうれしい誤算であった。その結果、副次的に与えた「自分の購入した和菓子と写真を撮る」という課題によって「お菓子探し」の達成感を参加者全員で共有することとなった。

全4回の会話クラスのうち3回目だけが外に出て実際に一般の日本人と会話をする課題が与えられていたが、1回だけではなく毎回外に出る、あるいは会話クラスのためにもっと多くの時間を計画してほしいとの感想が複数あった。

## (2) 考察

今回の会話クラスを行なった効果として一番にあげられるのは、学生の日本語でのコミュニケーションに臨む態度に変化が見られたことである。コース開始当初は自分の日本語はまだコミュニケーションには十分ではないとの理由から、英語が不得意な日本人との接触に戸惑う態度もみられたが、訪問先の店の人たちには非常に好意的に接していただいたこともあり、学生は初級レベルながら各自日本語を使用してのコミュニケーションに自信を持って臨めるようになったことはひとつの大きな進展でもある。

和菓子についてインタビューをすることによって日本文化の一端に触れると言う意図もあったが、この日本事情とも言えるものは学生が初級レベルであるということから特に課題に盛り込むことはしなかった。しかし、まったく日本文化や日本事情を感じるのではない課題よりも、日本文化に関わる課題のほうが学生の課題達成に臨むモチベーションが高くなるであろうと思われた。その点に関しては意外にも反響が大きくあまりにもインパクトが強かったため、学習した表現を使用したかどうか、一般の人とのコミュニケーション、インターアクションに関して目的をどの程度果たせたのか、ゴールシート記入時に振り返り、冷静に自己評価をすることが難しい状態であったように思う。時間をおいて次の回の会話クラスで振り返り、フィードバックを行なうこともひとつの方法である。

グループごとの行動は講師の側からの学生に対する直接のモニターが行なわれにくいいため、実際に行なわれたインターアクションの把握は学生の記憶の回想による自己評価、ゴールシートの完成に頼ることとなるが、ビデオカメラの活用や訪問する先（今回は和菓子屋）に対する訪問とアクティビティの意図の説明や協力体制の依頼によって、コミュニケーション、インターアクションについての具体的なフィードバックが考えられる。

また、事前の活動として言語に重点をおいて表現の学習に集中するだけでなく、和菓子がテーマであるなら和菓子に関しての情報をもっと事前にインプットして、講師側で設定したインタビューだけではなく、学生たちに疑問点を明確化させて、各自にインタビュー項目を作らせることも初級学習者でも可能であるだろう。

ロールプレイやシミュレーションではなかなか起こりえない、会話の相手からの予期せぬ返答や対応を経験することで日常的なコミュニケーション能力の向上が期待できる。先にも述べたようにフィードバックの充実をはかると共に、学生自身が自己評価を的確に出るような状況、評価項目が必要である。そして、客観的なコミュニケーション能力の測

定も今後の課題であろう。

## 5. 中上級クラス実践報告

### 5.1 概要

クラスの受講者は日本語学習者7名の他、日本語教授法のクラスを受講している日本人学生7名が日本語学習のサポートを行なうという目的で参加した。

米国人7名（男子5名 女子2名）

日本人7名（男子1名 女子6名）

4回の実践は以下の通りである。

#### 1回目

目的：運用 依頼，許可，勧誘，陳謝，感謝，敬語を習得する

方法：ロールプレイ，シナリオプレイ

#### 2回目

目的：後述

方法：教室外 課題達成型学習「善光寺めぐり」(\*2)

#### 3回目

目的：意見の述べ方，説得，賛成，反対，保留，話題転換，終結，確認を習得する

方法：ディスカッション「大学生活について」

#### 4回目

目的：発表の仕方を習得する

方法：プレゼンテーション「身近な人へのインタビュー」

当報告では課題達成型学習として、2回目に行なった「善光寺めぐり」(\*2)の実践を以下で報告する。

### 5.2 課題達成型学習「善光寺めぐり」

実践の目的，課題は以下の通りである。

#### (1) 目的

教室外に出かけ課題を達成する過程における一般の人々とのインターアクションを通して敬語の使用をマスターする。

#### (2) 課題

グループ毎 3, 4 人に分かれ，善光寺に出かけ，それぞれ以下の課題を達成するアクティビティを行なう。

- ①善光寺のある場所（輪廻塔や筆塚等）を探すという課題を達成する。探す過程で敬語で道を尋ねる。（場所はグループごとに異なる場所を指定した。）
- ②年上の人に敬語を使ってインタビューする。（内容は自由）
- ③善光寺参道の店で，長野で有名なおみやげについて敬語を使ってたずねる。

## 5. 3 結果と考察

### (1) 結果

#### 1) 実践結果

##### ①について

目立たない場所を探すことを課題として与えたため、場所を聞いてもすぐにわかっているという回答は返って来ず、何人にも聞いているケースが多く見られた。道を聞くときの尋ね方、感謝の表現は敬語を用いていたケースが多かった。

##### ②について

見知らぬ人に話しかけるため何人かには断られるケースも見られた。しかし、宣教の経験者が多かったため、相手に話しかけるというストラテジーは問題なかったようだった。名前や家族のこと、なぜ善光寺に来たのか、どこから来たのか、翌日の予定などを尋ねていた。

##### ③について

有名なおみやげを尋ねたところ、店の人が「七味とうがらし」と答え、米国人学生が「あ、そう」とわかったように答えていた場面があったが、後から一緒にいた日本人がこの学生に尋ねたところ、本人は七味とうがらしの意味がわかっていなかったということだった。わからない時に聞き返すストラテジーが必要だったと言える。

#### 2) 授業評価シートより

授業後の参加学生の評価シートには以下の記述が見られた。

米国人日本語学習者の感想としては、「外でいろいろな人と話しができていい練習になった。」「今日は普通の授業より楽しかった。教室から出て日本人と話したことは効果的だと思う。」「今まで勉強したことを外で使うことができてよかった。」等が挙げられた。サポート役の日本人学生からは、「なかなか答えてくれない人が多くていやだなと初めは思ったけれど、これが現実で学ぶ必要がある大切なことの一つだと思った。」「実際に外に出て知らない人と会話し課題をクリアするという今回のような学習形態は実践力がつくし学習者が生き生きと学習できてよいと思った。善光寺という場所も課題も日本らしくてユタの学生にとってよい題材だったのでないかと思った。今回は年上の人にインタビューするということだったが、実際年輩の人はたとえ日本語で話しかけても外国人というだけで構えてしまってあまりインタビューに応じてくれなかった。しかし、それも「断られる練習」にもなったと思う。たとえ断られても失礼にならないような態度、言葉で接していたのでよかった。」等が挙げられた。

また、今回サポート役として参加した学生には、以下のように、学習者の自立学習をどのように支援するかサポート役に戸惑いを感じた感想も見られた。「サポート役という立場でどこまでインタビューに関わったらいいのかということが難しく、少しヒントになるような誘導をしてしまった。」「今回はサポート役ということでどんなふうにサポートして

よいかはじめのうちは戸惑ったが、ところどころアドバイスをただけでユタ大生が主役で順調に活動できた。」

## (2) 考察

本実践における課題達成型学習は、課題を達成すること自体に目的があるのではなく、達成までのプロセスでコミュニケーションな目的(本実践では日常的な場面での敬語の使用)を達成することが目的である。また、教室場面ではなく、実際の日常的な場面で一般の人々と会話することが目的である。

教室内での日本語場面は相手とのインターアクションがスムーズに進行していくよう設定されている場面が多い。日本語教科書では、例えば、相手に道を尋ねる場面では、相手が丁寧に対応している場面がほとんどであり、断っている場面や、聞き返しの場面はほとんど見られない。しかしながら、実際の場面ではこのようにシナリオ通りにいく場合だけとは限らず、相手が急いでいて断る場合もあるし、相手が早口でよく聞き取れない場合もある。このような場合に、わからない時に聞き返すステテジーや、相手からの断られ方等が必要となってくると言えよう。また、今回設定した会話場面は、教室場面と異なり、見知らぬ人との会話場面である。初対面の相手にどのように話しかけるか、感謝の気持ちをどのように伝えるかも会話能力として大切ではないかと考える。

日常的な会話場面はシナリオ通りに運ばない場合が多い。今回は日常的な場面での課題を達成する過程で、実際に相手とのインターアクションを通し、敬語を使ったこととは、日常における会話能力の育成という点で効果があったことが学習者の評価シートからも読みとれる。

しかし、今後の課題も幾つか残されている。まず、このような学習活動をどのように評価していくかが挙げられよう。どのように学習者の会話能力が向上したかを具体的に評価することで本実践の効果がはじめて証明されるのではないかと考える。その意味では、本実践はまだ試行の段階であると言わざるを得ないだろう。また、評価シートにも幾つか散見されたように、このような会話練習で日本人学生がどのようにサポートしていくかについては今後検討が必要であろう。

4は川上が担当、5は徳井が担当、その他の項目は共同で執筆した。

## 注

- (1) 2001年度プログラムは、2001年5月13日～6月9日に行なわれた。フィールドトリップは一泊二日の戸隠、小布施旅行を行なっている。文化体験学習としては、日本人学生と共に日本の歌、書道、剣道、着付け、もちつき、世代間交流を行なった。
- (2) ユタ大学参加者の日本語学習や学校生活・日常生活のサポートをするために2001年度に初めて募集された。信州大学から学生がボランティアとして参加し、留学生1名に教育学部生2名づつが初顔合わせのイベントの時にゲームを行なって割り当

てられた。

- (3) 通常授業は学生（18名）を入門（5名）・初級（6名）・中上級（7名）の3クラスに分けた。4名の日本語講師が担当した。
- (4) 会話クラスの初級は通常授業の入門と初級を合同して（11名となった）行なった。中上級クラスは通常授業とおなじメンバー（7名）である。
- (5) 米国内では「Yookoso! An Invitation To Contemporay Japanese」（McGraw Hill社）、本プログラムでは「みんなの日本語初級Ⅰ」（スリーエーネットワーク社）を使用した。
- (6) 和菓子屋は学校から歩いて15～25分以内の店が事前に選ばれており、前日に電話で学生が訪ねていくこととインタビューをさせてもらうことので承を得ていた。

#### 文献

- ・信州大学教育学部国際交流委員会(2001)Memory Book of Nagano-Japan Summer Language Program 2001
- ・高見澤孟(1996)『はじめての日本語教育2』アスク
- ・宮崎里司・西條美紀・中山由佳（2000）「インターアクションと日本語イマーシヨンプログラム：99年度早稲田・オレゴン夏期日本語プログラム」『紀要』13号 pp113-128 早稲田大学日本語研究教育センター

(2002年3月31日 受付)